

## 田園将（まさ）にあれなんとす

帰りなん いざ

田園将にあれなんとす

（「帰去来の辞」 陶淵明作）

菊を采（と）る 東籬（とうり）のもと

悠然として 南山を 見る

（「飲酒 其五」 陶淵明作）

分け入っても 分け入っても 青い山

（「句集 草木塔」 山頭火作）

陶淵明（紀元365～427）は六朝時代、中国の詩人。下級貴族の家に生まれ、不遇な官途に見切りをつけ、41歳のとき「帰去来の辞」を書いて、故郷の田園に隠棲した。

第二詩「飲酒 其五」は、「東の垣根のもとで、菊を採り、悠然として 南山（名山として知られる廬山）を見る」という心境を歌っていて、古来田園生活の理想を現した詩とされる。

第三詩は、明治から昭和の放浪の俳人、種田山頭火の句である。山に分け入り、分け入る。人生に分け入るように。その哀しさが共感を呼んできた。

もうひとつ。ノーベル賞作家の大江健三郎氏は「人が死ぬと魂は古里の森の樹の根元に帰り、しばらく休んでまた生まれてくる」という彼の地方の伝承をいくつもの作品のなかで美しいイメージとして結晶させている。これらには、魂が帰ってゆく場所としての田園や山が見事に描かれている。

だが、待てよ。このような山々が、田園が、今の日本に残っているのか？

中山間の田園には、「山が降りてくる」という現象がおこっている。高齢化と収入減、労働力の減少により、耕作放棄された田畑が山に帰ってゆくのである。

一方山林は、これも同じ理由により、手入れのされない施業放棄林となり、荒れた山に変わってゆく。ここ2年間、林業の盛んな6地域で、比較的大面積の山林所有者（平均29ha）約900世帯の農林家にアンケートを実施した。面積にして2割前後の山林が施業放棄されていることが分かった。また、統計によると、20～500haの中・大規模山林所有者層（平均48ha）世帯の1年間の林業平均所得は1戸あたりわずか26万円（2000年）である。しかも、そこには労働力の9割を占める自家（家族）労働がコストとして換算されていないと考えられる。実質大赤字である。

森林・林業危機が言われて久しい。山を、森林を守ろうとする具体的な動きも出てきた。高知県では2003年4月から、「森林環境税」が発足したし、岡山県でも2004年4月から「おかやま森づくり県民税」がスタートした。

山林はわが国国土の体幹であり、背骨である。国土の67%を森林が占める世界有数の森林国である。

だが、今、「帰るべき田園は、山は、荒れている」。私たちの民族の魂はどこに帰ればいいのか？

誤解を恐れずに言えば、私は「研究者」ではない。若い頃は年に何十回も山林調査に入った「実務者」だ。この文章も「研究者のものとは思えない」かも知れない。しかし、許されよ。山を大切に思う気持ちは人一倍強いのだ。「山をどうにかしなければ！」「ひとりでも多くの人々に森林・林業の危機的状況を訴えなければ！」と日々思っているのである。それが私の研究の視点である。

（秋山孝臣）